

キーマンに  
聞く

日本学術会議会長  
黒川 清氏(写真左)



# 日本人よ、 旧世界からの 「脱藩」をめざせ！

— 新・人材考

聞き手 ● 三菱総合研究所  
社会システム政策研究部長  
主席研究員  
長澤光太郎(写真右奥)  
社会システム政策研究部  
主任研究員  
升本和彦(写真右手前)

日本学術会議の黒川清会長は、東大医学部から、日本を飛び出してアメリカUCCLA医学部教授に。そして、再び東大医学部から招かれ、そこにも安住せず停年を待たずに、東海大学医学部という経歴を持つ。権威に阿らず、反骨精神に溢れている。そんな黒川氏が日本学術会議の会長に選ばれたことを、自分でも意外だという。歴史から今後の地球世界まで、「旧世界」から抜け出す元気を、日本人に呼びかけた。

## 若者は海外をめざす

升本和彦(以下、升本) まず日本学術会議のトピックスとして、科学への関心を取り戻すための行動計画「プロジェクト・Science X」を決められました。その背景にある日本の教育、若者のあり方について伺いたいです。

黒川 清(以下、黒川) 科学と技術は二〇世紀を大きく変えました。百年前にやっといくつかの伝染病のワクチン等がわかり始めたし、アインシュタインが相対性原理を発見し、その四〇年後に原子爆弾が落

とされ、今日の電力の三〇%が原子力になっている。そういう風に、たった百年で世界は大きく変わりました。科学・技術の進展の結果、百年前の地球の人口が一六億人であったのに、現在は六三億人に増えている。しかし、科学と技術が良いものだというのは、二〇世紀の終わりまでを支配した人間の価値観なんです。

明治維新の前は、植民地主義が世界を支配しているパラダイムでした。それがアジアに来て、日本もやられるかと思われていたが、アメリカのペリー、ハリス等が最初に来

## くろかわ・きよし

昭和11年、東京生まれ。  
昭和37年、東京大学医学部卒業。  
昭和43年、東京大学医学部第一内科助手。  
昭和48年、アメリカUCLA医学部内科助教授。  
昭和54年、UCLA医学部内科教授  
平成元年、東京大学医学部第一内科教授。  
平成8年、東海大学教授、医学部長。  
平成14年、東海大学総合医学研究所長。  
平成15年、日本学術会議会長、内閣府総合科学技術会議議員。



たのは幸運だった。それは彼らが主にピューリタンだったからです。日本は四百年前に江戸遷都してから、徳川の鎖国の間に武士が人口の七割ぐらいになっていった。戦争はしないが文武両道の訓練をした人たちがピューリタニズムと出会うことが日本の近代を生んだ一つの要因です。

クラーク先生が札幌農学校に居たのはわずか八ヶ月ですが、そんな短い間でも新渡戸稲造や内村鑑三らの若者が感化を受けて日本のリーダーになっていく。大部分の日本人は真面目でよく働く。そして日本の儒教では中国や韓国と違って孝より忠の方が重い。これも江戸時代の遺産です。こうして勤勉な国民が良いリーダーに従った。また、江戸時代二五〇年にわたって戦争が無かったことで、国は疲弊していませんでした。これはラッキーだったんですが、大航海時代に鎖国だったことは、一方では日本人の価値観を構築するのにマイナスになっています。日本は「島国だから」と言っていて、世界に出遅れたことの言い訳にするが、原因は島国ではなく、「島国根性」なんです。

日本が高度成長を遂げ、「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と言われていい気になっていったが、世界の枠組みは冷戦であり、日本の基本政策はアメリカが決めていたことを忘れてはいけない。日本はその間、目覚ましい経済成長はしたが、おかしくなっていたんです。それを象徴するのが、バブル崩壊以降の九五年に起こった一連の事件です。まず阪神大震災。高速道路が倒壊したのは致し方ないとしても、手抜き工事の実態が明らかになった。技術立国のいいかげんな姿が顕になってしまいました。これは例外的な特殊なものとして処理されてしまった。その後、次々と企業の不祥事が起きました。次にオウム事件。これは教育の崩壊を象徴するものなんです。それを過激な宗教カルトの問題として処理してしまい、教育の根本的対策はなされなかった。それから住専の問題。日本の金融が時代に合わなくなったのを象徴する事件です。それまで金融機関をつぶさないと聞いていたのに、山一証券、日債銀、長銀等々がだめになった。しかし、同じ九五年に違う方向で大きな出来事がありました。プロ野球選手・野茂のアメリカ行きです。野茂が注目を集めたのは、日本人がアメリカでの彼をライブという開かれた情報手段で見たからです。これで日本人の鎖国的価値観が変わり始めた。ただ、九年後に松井が行った時の日本人の騒ぎは、日本の代表、巨人の四番が行ったからです。日本人のお上至上意識です。個人なんかない。巨人の四番、東大教授等が海外に行くと





熱弁を振るう黒川清氏(日本学会議会議長)と話題の本たち

と言ったのは、「人に聞いてばかりいないで、もっと大きく自分の頭で考える!」ということなんです。

## 脱藩者が新時代を創りだす

長澤光太郎(以下、長澤) そういう出会いを、今の時代で作っていかないといけませんね。

黒川 それが松下村塾の役割でした。私が考えているのは、現代の松下村塾です。幕末の何人かの燃えるリーダーは、当時でははみ出し者です。坂本竜馬、脱藩した人たちが、明治維新をもたらした。次の時代を作る青年は既に脱藩しているんです。

長澤 先生もある意味で脱藩者であったと思います。

黒川 そうかもしれませんね。だからワイワイ言ってるんですけど、四年前学術会議の副会長に選ばれ、現在会長で居るのは自分でも信じがたい。

長澤 時代が変わってきた。

黒川 周りが変わっているの

は確かですが、今までの既得権の大きい人、特に主流・本流にいる人たちはそれを認めたくないんですね。

長澤 海外から日本を見てこられたことも影響していますか。

黒川 海外に行くなら退路を断って行かないと。そうやって外から日本を見てみると、愛国心が湧いてくるのです。利根川進さんと話をしていると、いつも日本の批判になるんですが、お互い、これは愛国心の発露だと。

長澤 ところで、アメリカの中等教育をどう見られますか。

黒川 中等教育はそれほど良くない。ただ、アメリカのエリートを構成しているのは大学ではなく、その前のプレップスクールの役割も大きいと思います。

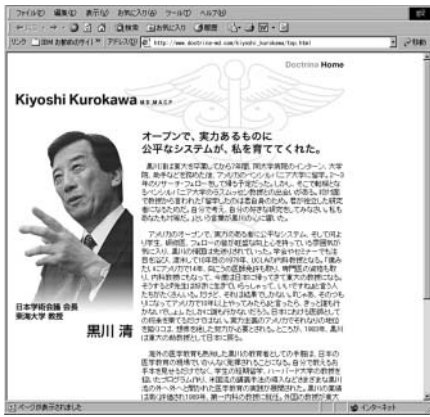
長澤 J R 東海等が、全寮制の中等教育機関を設立することが話題になり、先生も大変期待されていますね。先生は東海大学医学部で短期臨床留学をおやりになっていますが、学生はどういうところが変わ

日本人は自分たちの価値観をテストされるので心配でやきもきする。現実には、最近では東大にいくより、最初からアメリカの大学に行こうという高校生が出てきた。それが大切なんです。リアル・マドリッドからオファーが来たのに、日本のチームに行くのか、という選択です。明治の昔だつて、日本の高校からオックスフォード、ハーバードに行っている人たちが何人もいます。

他方で、バブル期に会社から海外に派遣してもらい MBA を取ってきた社員が日本に帰ってきて特別扱いされましたか、

会社の役員になりましたか? MBA を取って来ても特別扱いしない、というのは、いかにサラリーマン根性、島国根性が日本社会に染み付いているかの証拠です。

森嶋通夫先生の『なぜ日本は行き詰まったか』は面白い本です。二〇五〇年に日本はどうなっているから書いている。その年に六〇歳の人は現在一四歳です。これは内村鑑三がクラーク先生に会った歳なんです。そういう時にどういう炎に火が付くかが大事なんです。クラークが「ボーイズ・ビー・アンビシャス」



※黒川氏のホームページ  
http://www.KiyoshiKurokawa.com

りましたか。

**黒川** 今では留学中は定期的  
にメールで報告してくるんで  
すが、皆が言うことは、指導  
教員に「こんなことを訊いて  
いいでしょうか」と質問すると、  
「世の中にバカな質問なんてな  
い、遠慮するな」と言われると。

**升本** そういうどんどん訊く  
という学生が日本に帰ってきて、  
日本の状況を変えていくのだ  
と思います。

**黒川** 日本のエスタブリッシュ  
メントに挑戦していく。人間  
力です、根本は。今後の日本  
はどうなるかを考えますが、  
明治以来、「富国強兵」、二〇

世紀後半は「経済成長」がで  
きて、これからは何か。ネッ  
トスケープ社が出たのはたっ  
た一〇年前なんです。人材

の育成が叫ばれ、科学技術に  
巨額の予算が付けられつつあ  
りますが、その目的は何でしょ  
うか。さらなる経済発展のた  
めですか？ エネルギー消費

は際限なく拡大し、中国はこ  
れから本格的に原子力発電所  
の建設に着手します。これら  
がテロの対象になったらどう

しますか？

二〇世紀のパラダイムは世  
界競争でした。軍事技術開発  
のために莫大な国家の投資が  
行われ、これらが科学と技術  
と民生技術の発達に貢献した。

しかし二一世紀を動かすパラ  
ダイムは、人口問題、環境問題、  
拡大する南北格差です。科学  
技術の投資はそちらの目標に  
向けるべきなんです。つまり、  
持続可能な地球のために、と

いうことです。こうした問題  
を少なくともアジア的な視野  
で考えられる人材の育成こそ  
が必要なのです。日本学術会  
議でもアジア諸国のアカデミー、  
そして国際的なアカデミーと  
の協力を活発化しています。

### 余裕がNPOを生み出す

**黒川** ところで今、皆さんは  
何を買いたいですか。三〇年  
前は車、カラーテレビ、冷蔵庫、  
エアコン等、いくらでもあり  
ました。しかし今、欲しい物  
はないでしょう。これから日  
本でやらなければならぬこ  
とは例えば、「同じ値段で住ス

ペースを倍にすること」です。  
第一に、気持ち豊かになる。  
第二に、女性の社会進出がし

やすくなる。子どもをベビーシッ  
ターに預け夜遅くても待つて  
もらえて、安心して仕事に出  
られる。全般に余裕ができる、  
これが最も大事です。リラック  
スできる。

**長澤** そういう住生活の余裕  
とも関連すると思います。ス  
ローラを中心として、スローラ  
イフの流れが出てきています。

**黒川** そう。日本でも世界的  
にもNPOが出てきたのはな  
ぜだと思えますか。二〇世紀  
までは、国家の独自の歴史・  
価値観があつて、国の形がある。  
そして国には、公共部門と民  
間部門がある。民間部門は利  
益追求をめざす。両者の緊密

な関係が、日本の発展段階で  
違ひ、発展途上ほど近い。日本  
は、緊密のサークルに入れて  
もらえなかつた後発企業が海  
外に出て行き、成功しました。  
国際化時代の民間部門にマネジ  
メント・ノウハウを提供した  
のがMBAなのです。ただ、こ  
れまではあくまで、政府と民  
間の二者の問題だった。

一方、私たちは寿命が延びて、  
企業での会社生活を辞めた後  
の人生を考えるようになり、

医療、福祉等公共生活で自分  
の生きがいを求めるようになった  
んです。余裕と生きがいを  
求めることの産物です。これが、  
NPOが生まれてきた理由です。  
NPOは従来、主に公共部門  
が請け負ってきたものを、引  
き受ける動きなんです。政府、  
企業とは違う第三の動きです。  
これが二一世紀の社会を築い  
てくる。新しい雇用も生まれ  
るし、ボランティアも良い。フ  
ルタイムでなくてもいいんです。

それが自治体レベルのコミュ  
ニティから出てくるのが重  
要で、自治体はこれをサポー  
トすべきです。ハンガリーで  
行われている事例ですが、所  
得税の一〜二%を自分の好き  
なNPOに回せる、この税金  
は国は取らないという、そう  
いう制度を参考にすべきだ  
と思います。自分の住む地域の  
NPOにお金を出すと、教育、  
医療、福祉のNPOのサービ  
スも良くなります。個人個人  
がまず地域から社会を創って  
いくんです。

**長澤・升本** 貴重なお話をど  
うも有難うございました。  
(五月二五日、日本学術会議にて)